city & life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第32回（2021年度）
緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第一生命グループが応援してくれます！「緑の環境」への熱い思い！を選びます。

審査委員会委員長 進士五十八

ウィズコロナを試行する昨今、全国的に公園緑地利用者は激増している。

オープンエアの野外。公園や広場のオープンスペースなら、人と人の距離はとれるし風通しもよくアウトドア・レクリエーションには最適な場所だと誰もが実感できるからだ。

ただ財政上の制約から必ずしも身近に緑地を持てない市民も少なくない。それに手をさしのべようと決断してくださったのが、「第一生命グループ」の皆さまと本賞である。

だから審査委員長の私としては「緑の環境プラン大賞」の凄さを強調しておかなければならない。

これまで私は、都市景観と緑のまちづくり、国際バラとガーデニングショウ、農のある風景フォトコンテスト、田園地域の自然再生、企業の社会貢献としての生き物にぎわい活動コンクール、農家と市民の協働による里山里海保全活動など多彩な環境市民活動に委員長として協力してきた。ただ、そのほとんどは受賞団体の主体的で継続的な努力を審査し表彰するものだ。お金も身体も自前である。

しかし本賞は応募案が良ければ、シンボル・ガーデン800万円（上限）、ポケット・ガーデン100万円（上限）の材料・工事費用を、第一生命グループが助成してくださるのだ。

第32回の「国土交通大臣賞」の「ビバテラス」と「園庭まるごとビオトープ」の図面とスケッチをみてほしい。プロの図面、アマのスケッチ。どちらであろうが、審査委員会は応募者らの緑の環境への熱い思いを審査しているのです。奮って応募してください。

しんじ・いそや── 福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士（環境学・造園学）

表紙──九段会館テラス 九段ひろば（関連記事:p6）
裏表紙──笑顔はぐくむこころの森ガーデン（関連記事:p4）
photo:坂本政十賜

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	BeBA TERRACE運営協議会	ビバテラス・まなびの森庭プロジェクト	岩手県盛岡市	2
	特定非営利活動法人こころの森	笑顔はぐくむこころの森ガーデン	宮城県石巻市	4
緑化大賞	合同会社ノーヴェグランデ	九段会館テラス 九段ひろば	東京都千代田区	6
	宗教法人 唐招提寺	唐招提寺「香りの薬草園」鑑真和上 才花苑	奈良県奈良市	7

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	社会福祉法人どろんこ会 八山田どろんこ保育園	園庭まるごと ビオトープ プロジェクト	福島県郡山市	8
コミュニティ大賞	株式会社エルプレイス ハピネス保育園南境	日本の四季を五感で感じ、食育活動に繋がる保育園	宮城県石巻市	10
	株式会社チャレンジドジャパン	地域に拓けた「屋根緑化」と 「空中アート」で共生環境へ!	長野県北佐久郡	11
	社会福祉法人 樹 聖華みどり保育園	あびっこたちの『ぼうけんやま』	千葉県我孫子市	12
	社会福祉法人慈愛会 瞳ヶ丘こども園	五感で感じる色彩と香り。時を超えて紡がれる記憶	静岡県浜松市	13
	渡辺硝子株式会社	–すべてを育む、風の吹く丘–「育むガーデン河芸」	三重県津市	14
	特定非営利活動法人 合氣道播磨裕和会	地域を結び、世代を結ぶ。食育庭園『ゆうわの庭』	兵庫県神崎郡	15
	奈良・人と自然の会	古都に広がる里山の彩り	奈良県奈良市	16
	広島市立倉掛小学校	令和に伝えるふるさとの自然「ふれあい里山ガーデン」	広島県広島市	17
	西日本短期大学 緑地環境学科 山本ゼミ	地域の寄る処『ふる里の庭』へ	福岡県糸島市	18
	NPO法人みさと	もりのちいさな図書館 ～ひろがりのなる庭～	熊本県葦北郡	19

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞

BeBA TERRACE運営協議会
ビバテラス・まなびの森庭プロジェクト

岩手県盛岡市

●余計なものが何もない、シンプルな原っぱとして整備した、大きな芝生広場。2022年10月撮影（photo提供：BeBA TERRACE運営協議会）

公民連携で蘇る、遊びと学びの公園

盛岡駅から徒歩15分ほど、雫石川を渡った先に、全体で28万6000㎡もの広さをもつ中央公園がある。開設は1978年。敷地内には岩手県立美術館を始め、子ども科学館、先人記念館などの施設を有するが、3割ほどのエリアは未整備のままの緑地となっていた。そこで盛岡市は公民連携事業による未整備地の活用を計画。Park-PFI（公募設置管理制度）を用い、民間事業者による公園内への施設の設置・管理を開始した。選定されたのは、岩手県資本の5事業者からなる「BeBA TERRACE運営協議会」。「あそびとまなびをつなぐ場」として「BeBA TERRACE」と名付けられたエリアは約1万2410㎡。ここに保育園を始め、飲食店や体験学習施設などを建設。これらの収益により、エリア整備と維持管理を継続的に行っていく。

今回、助成を活用したのは、一帯の緑化整備だ。既存の森は生かしつつ、一部は移植して大きな広場として芝生を張り、思い切り体を動かすことができる「あそび場」に。施設の裏手には小さな芝生広場も造設。こちらには畑もつくり、体験できる「まなび場」とした。また建物の周囲には木陰をつくるクヌギやコナラなどの樹木を植栽。カフェのテラス席も、木々が育てば、より自然との一体感が得られるようになるだろう。

コロナ禍の影響もあり、施設建設が遅れたが、2023年度内にグランドオープン予定。「心地よさ」が価値となる、新たな緑地のこれからに期待したい。

●芝生広場に面してテラスを設けたカフェ。自然を満喫できる開放感あるカフェは、すでに多くの人々が訪れる、人気スポットになっている

●今回の助成に対する応募書類に付されたプラン図

●2020年に竣工し、すでに運営されている保育園。園庭には、既存のクヌギやコナラなど、どんぐり林を残した

●カフェなどの建築物の裏手に設けられた小さな芝生広場。「BeBA農園」と名付けられた菜園もある

●芝生広場の北側には、既存のニセアカシア林を残すと共に、クヌギやコナラを移植して集め、緑のボリュームをつくった

●地元の農家が育てた野菜や果物、地場産の加工食品、鉢植えや切花なども販売されている直売所

●カフェなどの裏手。駐車場側から芝生広場へのエントランスも兼ねているため、店舗サインも配され、おしゃれな佇まいとなっている

国土交通大臣賞

※第31回（2020年）にて本賞を受賞

特定非営利活動法人こころの森
笑顔はぐくむこころの森ガーデン
宮城県石巻市

●ちょうどネモフィラが見頃を迎えていた「笑顔はぐくむこころの森ガーデン」

八つの町に思いを馳せる、色とりどりの花の庭

石巻市南浜地区。38万8000㎡におよぶこの場所には、8地域に約1700世帯、およそ5000人の暮らしがあった。それが、東日本大震災の津波とその後の火災により消滅。これに伴う地盤沈下もあり、防災上、非居住地域に指定された。残された広大な土地は、2016年度より国・県・市により「石巻南浜津波復興祈念公園」として整備が始まり、2021年3月に開園した。

同祈念公園内の、市民活動拠点と位置付けられた一角に「笑顔はぐくむこころの森ガーデン」が完成した。運営は石巻市民有志による「特定非営利活動法人こころの森」。同法人では祈念公園計画が立ち上がった2014年より、地域自生種の木々や「石巻南浜八花[註]」と称する8種類の花の育苗を始め、これを祈念公園に植樹し、失われた地域の記憶を未来へつなぎ、人々の温かな交流を育む公園づくりを計画。代表の古藤野靖さんは「季節ごとの花が咲き、鳥や蝶が訪れる。そんな様子に〈命の瞬間〉を感じてもらえるような公園にしたいと思い、活動しています」と教えてくれる。

「こころの森ガーデン」の広さは約2500㎡。復興祈念公園内に設けられた、8地域の慰霊と復興の祈りのポイントをつなぐ拠点となることを意識し、ガーデン内にも「八つの庭」を設けた。植栽にあたっては、地域内外から多くのボランティアが参加したという。木々が育ち、花が増えるのに併せて、鳥の声が増えた。訪れる人々の笑顔も、いっそう増えているに違いない。

●ガーデンの東側、NPOのメンバーやボランティアが種から育てた地域自生種の木々を植えたエリア

●左手の建物は同法人で運営する「ここ森ガーデンカフェ」。自然を学ぶワークショップやイベント会場としても利用されるが、日常的には、イタリアン・ジェラートが人気の、訪れる人々の憩いの場となっている

●資材置き場ながらおしゃれな佇まいを見せる小屋や、丸い水景もガーデンのアクセントになっている

●カモミールやナデシコがガーデンを彩る

［註］石巻南浜八花=ハマナス・ウスギモクゲンジ・ハマヒルガオ・ハンノキ・チガヤ・センダイハギ・ミソハギ・ハマギク

●蛇行する園路に沿って色とりどりの花が咲き、楽しげな雰囲気が感じられる

●小さな子どもも安心して遊べる場になっている

合同会社ノーヴェグランデ
九段会館テラス 九段ひろば
東京都千代田区

●芝生広場にはシンボルツリーのケヤキを配した

●緑地は施設利用者の憩いの場に

●緑豊かな周辺地から飛来する蝶を観察できるバタフライガーデン

●お濠を望む屋上庭園では、エドヒガンやミツバツツジなどの植栽が楽しめる

●レモン、ナツミカン、ユズなど実のなる木も植えた

人々が憩う緑豊かな広場に再生

九段会館テラスは、旧九段会館の保存・建て替え工事を経て、2022年10月1日にグランドオープンした。

従来から、建て替えの上位計画にお濠（牛ヶ淵）沿いの歩行者ネットワーク整備があり、広場の活用を模索していた千代田区と協議して、近隣の住民やオフィスワーカーが憩う地域に根差した場所に再生した。

九段ひろば入口には既存のクスノキを保存し、歴史的景観を残すよう配慮した。一方、旧九段会館（保存棟）の正面玄関前には天然芝を敷いた広場を配置。各種イベントスペースとしても活用する。

西側のお濠に続く傾斜地には、段差を利用したファニチャーやパーゴラを設置した。高木や地被類を植栽して、広大な北の丸公園の緑地との連続性をもたせるよう工夫した。さらに生物多様性の観点から名付けられたバタフライガーデンには、色とりどりの花が揺れる。近隣の園児たちと植え付けのイベントを行い、継続して水やりをするなど、生活の一部となる場所にしていく。こうした取り組みを屋上庭園にも広げ、地域住民と菜園で収穫をする催しも計画している。

お濠を望む歩行デッキには既存の桜を生かし、四季の移ろいを楽しみながら過ごすことができる。隣接する昭和館やかがやきプラザともつながっており、敷地を回遊することも可能だ。共用部に緑地を増やし、オフィス機能をもつ新築棟の環境にも絡めることで、一体感のある居心地の良い空間を形成している。

宗教法人 唐招提寺
唐招提寺「香りの薬草園」鑑真和上 才花苑
奈良県奈良市

●園路を散策し、花と香りを楽しむ人々

●中央に配されているのがシンボルツリーの「ケイカ」。4～5月頃に白く可憐な花をつける。薬草園の設計は居場英則氏（登録ランドスケープアーキテクト〈RLA〉）が担当

●シソ、ウイキョウなど、香り高い薬草が園内を彩る

●移植されていた薬草類も、ていねいに管理されていただけあって、里帰り後もしっかり根を張っている

●唐招提寺はハスの寺としても知られている。蓮池の整備はこれからだが、鉢植えのハスが見頃を迎えていた

鑑真和上の事績を伝える薬草園

鑑真和上により開基された唐招提寺。我が国における律宗の開祖である鑑真和上には、医学・薬学を広めた事績もある。唐招提寺ではこうした史実を伝えるため、1988年、和上伝来の薬草を栽培する薬草園を整備。非公開ながら、多数の賛同者を得て、これを運営してきた。一方、1998年に国宝金堂の平成大修理に着手。その際の仮設建物用地に薬草園をあて、植栽されていた薬草は、支援者のもとに移植、保管することに。この後、金堂の平成大修理は2009年に完了。仮設建物用地跡を新たな薬草園として整備する復興計画が2018年よりスタートした。新しい薬草園は参拝者にも公開し、和上の功績と薬草の知識を学ぶことができる場とすると共に、隣接する戒壇で儀式を執り行う際の僧侶の花道も兼ねる仕様とすることになった。

薬草園の広さは約2240㎡。第一期工区（約1400㎡）が2022年4月に施工完了し、一部が公開された。全体としては2024年4月の完成予定だ。

薬草園では、和上ゆかりのケイカ（瓊花）をシンボルツリーとし、支援者のもとに移植していた薬草を戻しながら、シソやハッカ、ウイキョウなど、香りの良い薬草や薬木をバランス良く植栽。その数、木本類23種、草本類39種、約2600株におよぶという。

生涯を通じ、民衆救済に尽くした鑑真和上の功績と想いを伝える、美しく、香り豊かな薬草園全体の完成を、心待ちにしたい。

国土交通大臣賞

社会福祉法人どろんこ会 八山田どろんこ保育園
園庭まるごと ビオトープ プロジェクト

福島県郡山市

●園庭の一角に広がる実りのエリア。八山田どろんこ保育園では、田んぼや畑を、子どもたちと地域の人たちの協働の場とも位置付けている

自然を丸ごと体験する伸びやかな園庭

畑の中にあるのは、収穫時期を過ぎ、割れてしまったスイカ。その周りをよく見ると、アマガエルがたくさんいた。「割れたスイカを見て、残念に思ったり、こんなふうに枯れていくんだと知ることも子どもたちにとっては貴重な学びです。カエルは田んぼで育って、畑や園庭にもたくさん出てきました。子どもたちは大喜びしていますが、職員は悲鳴をあげています」と笑いながら教えてくれるのは、八山田どろんこ保育園の真島里佳施設長だ。既製の遊具のない、緑豊かな自然公園のような園庭の広さは約530㎡。木々を植えた森のようなエリア、田んぼや畑を設けたエリア、カキやイチジクなど実のなる木を植えた果樹の森エリアで構成され、全体を大きなビオトープと位置付けている。

今回の助成では、田んぼや畑を造成、果樹も増やし、モッコウバラが育てば緑のトンネルになるトレリスや枕木の小道なども整備した。春に完成した畑では、スイカやメロンなどの他、ナスやトマトなどの夏野菜がたくさん収穫でき、給食に取り入れてみんなで食べた。トマトはケチャップにも加工したという。

園庭の畑に作物が実ったり、田んぼの苗が育ってきたりすると、通りかかる近隣の人々も目を止め、子どもたちや職員と言葉を交わす機会が増えた。子どもたちも誇らしげに、自ら育てた畑の作物を紹介したり、捕まえたカエルを見せてあげるのだとか。園庭の豊かな緑が、地域とのコミュニケーションも育んでいる。

●田んぼは、「田んぼトープ」と名付けられ、イネだけではなく、たくさんの生物が生きる自然循環の場となっている

●助成の応募時に描いた園庭の完成予想図

●ゴーヤのトンネル。じつはキュウリのつもりで植えていたらしい

●枕木でつくった小道。トレリスの足元にはモッコウバラが植えられ、育てば緑のトンネルになる

●畑のあちこちにアマガエルがたくさん出現

●子どもたちが元気に走り回るため、受賞プレートの角にはコーナーガードをつけた

●サツマイモやナスが育つ畑から園舎方向を望む。起伏のある園庭は自然公園のようだ

株式会社エルプレイス ハピネス保育園南境

日本の四季を五感で感じ、食育活動に繋がる保育園

宮城県石巻市

●畑の畝に、トマトやピーマンの苗が整然と並ぶ

●毎日のお散歩の行き帰りに、花々や野菜を眺め、その成長を楽しみにしている子どもたち

●花壇と畑がすっきり整備され、地域の人々も関心をもってくれるようになった。キンモクセイやサクラもポイントとして植栽した

●沿道を鮮やかに彩るサルビア、マリーゴールド

●色とりどりのナデシコ。畑にプレートをつけたことで、子どもたちも関心をもつようになった

育てて食べて、元気なからだをつくる庭

2017年、0～2歳児を預かる小規模保育園として開園した「ハピネス保育園南境」では、開園当初から子どもたちの食育に力を入れている。園舎と道路の間にあった空き地227㎡ほどを借り、サツマイモやトマトなどの野菜をつくってきた。ただ、地域の人々が行き交う道に面していながら、雑然とした印象になってしまいがちであること、さらに、小さな子どもたちには野菜と草花の区別がつかず、関心をもってもらえないことが悩みの種だった。

そこで、今回の助成を活用し、畑の整備に着手。道に近い面には季節の花を植え、その背後には野菜を育てる畑をつくった。また季節の彩りや香りが感じられる、サクラ、キンモクセイなど、中高木の苗木も植えた。「きれいになった畑には、子どもたちはもちろん、地域の方々も関心をもってくれて、草むしりをしてくれたり、井戸端会議の場所になっていたり。いつの間にか、地域の交流拠点になっています」。そう教えてくれるのは、法人代表の伊藤由美子さんだ。

ちょうど、子どもたちがお散歩から帰ってきた。カートに乗った小さい子どもたちも花壇の花々を眺め、先生に「きれいねぇ」と声を掛けてもらいながら、笑顔で何かを指差したり、楽しげにおしゃべりしている。そしてもちろん子どもたちは、「ハピネスの畑」と呼び親しむこの場所で育った野菜を食べることも、何よりの楽しみにしているのだ。

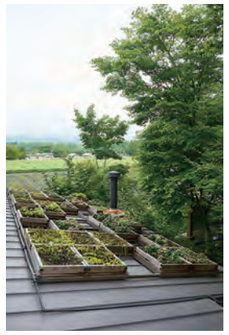
※第31回（2020年）にて本賞を受賞

株式会社チャレンジドジャパン

地域に拓けた「屋根緑化」と「空中アート」で共生環境へ!

長野県北佐久郡

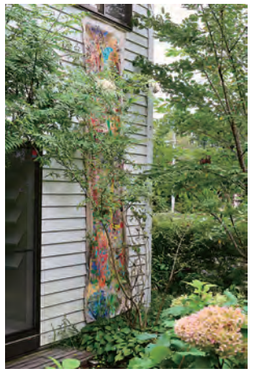
●それぞれのパレット内には、愛らしい実をつけるクランベリーやワイルドベリー、赤やピンクのペンタスなどが植栽されている



●施設の周辺には、キャベツ畑やソバ畑が広がる

●中庭の植栽とも一体化し、いっそう自然の豊かさが感じられる

●レストランの屋根上に、パッチワークのように配された「パレット状緑化コンテナ」



●レストランの窓から見える母家の壁には、センター利用者によって描かれたタペストリーがかかる

［註］就労継続支援B型=障がいや難病などにより、雇用契約を結ぶことが困難な方が就労訓練を行うことができる事業所やサービス

高原の風景に彩りを与える屋根緑化

軽井沢駅から6kmほど。キャベツ畑の広がる高原風景のなかに、障がい者の就労支援事業などを行う株式会社チャレンジドジャパン「軽井沢センター」がある。就労継続支援B型[註]施設として、デザインやクラフトなど、クリエイティブな仕事の支援も行っているのが特徴だ。旧邸宅をリノベーションした施設は、路地の奥に佇む分棟式の建物。センターのある母家と中庭でつながる離れのような建物に、2020年、イタリアンレストランが入居した。センター利用者らによる絵画をモチーフとしたファブリックをインテリアに用いるなど、緩やかに連携しながらの運営を行っている。

今回の助成では、このレストランの屋根上を緑化。「パレット状緑化コンテナ」と称する、軽量で持ち運べる大きさのプランターを複数配置し、夏場の遮熱、冬場の保温効果による省エネ対策とする他、景観や生物多様性の保全を目指す。コンテナには軽井沢の気候やメンテナンスの容易さに配慮し、愛らしい実をつけるワイルドベリー、赤やピンクのペンタスなどを植栽。さまざまな植栽が施されたコンテナをパッチワークのように配置することで、アーティスティックな雰囲気が感じられる屋根の景観をつくっている。

屋根上の草花は畑越しの沿道からほのかに見え、レストランと、アートやデザインの工房としての施設の存在をさりげなく伝える。施設と地域、そして遠来のお客さんとをつなぐ、アートな屋根緑化が実現した。

社会福祉法人 樹 聖華みどり保育園
あびっこたちの『ぼうけんやま』

千葉県我孫子市

●築山の頂上から見下ろす段々畑ゾーン

●ヤマモモの木にも小さな実がついていた

●畑で育つ白菜の花

●森ゾーンにはどんぐりが実るシラカシを植樹

●我孫子香取神社側にはアジサイを植えた。夏場の渇水で株が減ってしまったが、今後増やしていく予定

●園庭の一角に設けられた築山。頂上にはシンボルツリーとしてモミの木を植えた。保育園の隣は江戸時代に創建したとされる我孫子宿の鎮守・我孫子香取神社

子どもたちの「ワクワク」が詰まった築山

園庭の一角に設けられた築山。一部は木々を植えた森に、一部は段々畑に、一部はシートを敷いて裸足でも遊べる場にと、3面構成になっている。

「森ではどんぐりを拾って、畑では野菜の収穫を楽しんだり、訪れる虫を探したり。シートを張った斜面では、大の字に寝っ転がって空を眺めたり。子どもたちはこの築山で、本当にたくさんの発見をしています」

久保木久子園長は、笑顔でそう教えてくれる。聖華みどり保育園は、1928年に町立保育園として開設、2008年に民営化され、今年70周年を迎える。定員120名の大規模保育園であるだけに、園庭にも十分な広さがある。ただ、民営化されるまでは無機質なグラウンドだった。そこに職員らで地道に木を植え、花を植え、子どもたちが自然を感じながら、のびのび遊べる環境をつくってきた。築山の造成もその一つで、今回の助成を受け「念願が叶いました」。また、築山の裏手、隣接する我孫子香取神社から見える位置には、地域の人にも楽しんでもらいたいとアジサイを植えた。

畑には、菜の花のような花が咲いている。収穫時期を逃した白菜だ。ブロッコリーも小さな黄色い花をつけている。「野菜も食べるだけではなく、芽吹きから花や種子をつけて枯れ、そして土に還るまでを、体験として知ってほしいんです」。収穫した野菜を食べることも、それがどんな花をつけるのかを知ることも、子どもたちには、どちらも大切な体験に違いない。

社会福祉法人慈愛会 瞳ヶ丘こども園
五感で感じる色彩と香り。時を超えて紡がれる記憶

静岡県浜松市

●スイレン鉢には、定期的に水やりをしてビオトープを保つ

●10月は金木犀の香りが楽しめるシーズンである

●水はけを改良した土壌にアリッサムの白い花弁が揺れる

●木や草花の名称はあえて伝えず、自然林に触れるような体験を重視した

●子どもの目線だと見上げる高さになる緑豊かな園庭

香りが育む豊かな情操

瞳ヶ丘こども園は、浜名湖の東岸に広がる瞳ヶ丘団地住宅の東側に位置する。三角形の敷地には、緑・白・茶色を基調とした園舎と、面積の半分以上を占める園庭がある。2017年に園舎と園庭を改築した際、全国の園を視察し、良い所を積極的に採り入れた。

園庭北側の尖端部分には1年を通じて木や草花を楽しめるスペースを設けている。植栽は、地域の豊かな自然と調和するよう配慮。落葉樹や常緑樹の葉の大きさや色づき方の変化を意識し、生長すると花が咲き実のなる木を軸に選定した。現在は生育の途中だが、子どもたちと生長を見守る楽しみが増えた。

とりわけ、山口尚園長が作庭のコンセプトに挙げたのは香りだった。職員から聞いた「幼少期の記憶に金木犀の香りがあった」もヒントになった。四季ごとに感じる香りが園内活動と結びつき、記憶の深い場所に定着していくのではないかと考えた。そこで、月ごとに花の香りを楽しめる植栽でアイデアを形にした。さらに、散歩の途中で通りがかった地域住民にも香りを感じてもらいたいと期待する。

対象地を回遊する小径は大人の足でわずか十数歩だが、子どもにとっては十分な奥行きを感じられる緑地である。風が木々の間を通り心地良いざわめきを奏で、木漏れ日が季節の移ろいを告げる。子どもたちは思い思いに園庭で遊ぶようになり、職員の心にもゆとりができた。相互にリラックス効果が生まれている。

渡辺硝子株式会社
―すべてを育む、風の吹く丘―「育むガーデン河芸」

三重県津市

●助成対象地は右手の小高い丘の上。手前の左手はもともとあった柿の木を生かした「カキ畑」

●クヌギやコナラを植林した、見晴らしの良い「どんぐりの丘」

●「植樹パーティー」で植えた木にはプレートもつけた

●伸びすぎて鬱蒼としていた竹林を伐採して造成した「ヤブツバキと竹の林」。竹林に埋もれていた既存のヤブツバキを生かした

●「どんぐりの丘」から見下ろす「そよかぜひろば」。あずまやは、ワークショップやイベント時に活用する

里山を再生し、子どもたちの本能を刺激する遊び場に

三重県津市の市街地から8kmほど。小字で成瀬と呼ばれる一帯に山林が広がる。従来、里山として地域の人々の生業の場となってきたが、近年は管理が行き届かず荒れた状態に。その一角に、子どもたちが自然を学び、楽しむ場「なるせ自然共和国」が誕生した。全体の広さは約7000㎡。運営は山林所有者の渡辺硝子株式会社。プランを構成したのは、エクステリアプランナーでもある渡邊智子さんだ。計画時の仮称を「育むガーデン」としたように、子どもたちが自然の中で心身を育み、さらに、この土地のさまざまな生き物をも育む場として構想してきた。

助成を活用したのは、全体のうち約1000㎡の、少し小高い場所。竹林を伐採して広場を造成すると共に、SOFIX（土壌肥沃度指標）を用いた土壌改良も行った。そのうえで、20名ほどの参加者と、クヌギやコナラなど落葉紅葉樹を植える「植樹パーティー」を実施。「ヤブツバキと竹の林」と「どんぐりの丘」を完成させた。

この他、敷地の入口付近にはあずまやをつくり、自然を使ったワークショップを開催する場に。環境省の助成を受け、循環型トイレも設置した。「子どもたちがどろんこになるのも気にせず遊べるような、本能を刺激する場にしていきたい」と渡邊さん。今後は、各種ワークショップやイベントを企画し、多くの人に「本当の自然」を体験してもらいたいとも語る。里山の維持管理のモデルケースとなることを期待したい。

特定非営利活動法人合氣道播磨裕和会
地域を結び、世代を結ぶ。食育庭園『ゆうわの庭』

兵庫県神崎郡

●廃棄予定の石材を地域の方から譲り受け、テーブルやベンチをつくった。自然を満喫できる憩いの場に

●鬱蒼としていた木々を剪定、園路などを復活させ、日本庭園の佇まいを取り戻した庭。埋まっていた石なども掘り起こし、伸びやかな広場を構成した

●庭園に彩りを添えるマリーゴールドやサルビア。奥に見えるスイカは、いつの間にか生えてきたそう

●庭に埋まっていた巨大な石を掘り起こし、テーブルとして再利用

●子どもたちの活動しやすさを考慮し、人工芝を張った広場。左手の建物に沿って、兵庫県花のノジギクを植えた。11月から12月には白い可憐な花をつける

合氣道の心を軸に、健やかな体と心を育む庭

兵庫県のほぼ中央に位置する神崎郡市川町。この町の築110年に及ぶ古民家は、約800㎡もの庭に、離れももつ邸宅だったが、長らく東京の親族が管理するだけの空き家となっていた。2020年、姫路市の特定非営利活動法人合氣道播磨裕和会がこれを取得、障害児通所支援事業施設「ゆうわ・あいき」として再生した。理事長の國本康彦さんは、学校教員を務める傍ら、長年、合氣道の師範として、子どもたちの指導にもあたってきた。市川町では約20年間、中学校で教鞭をとった。退職後、地縁のあるこの町で「児童発達支援」と「放課後等デイサービス」をスタートした。

邸宅の再生と共に、庭の整備にも着手。かつては「中家」の屋号をもつ地域の拠点であったことから、閉ざされていた門を開放し、通所する子どもたちと地域の人々が交流できる庭づくりを計画。今回の助成を受け、もともとの日本庭園としての佇まいを活かしながら、植栽を整え、広場を形成。ここで、餅つき大会やバーベキューなどを行い、子どもたちと地域の人々が食を共にする「食育庭園『ゆうわの庭』」を完成させた。

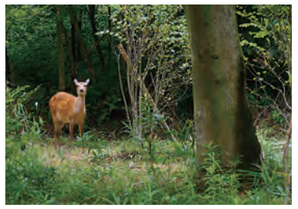
「廃棄予定の石材を地域の方々からいただき、スタッフ総出でテーブルやベンチもつくりました。子どもたちも、地域のみなさんに見守られながら、のびのびと過ごしています」と國本さん。

合氣道は「和」の武道とも言われる。温かな雰囲気に包まれた庭は、その精神を体現しているようだ。

奈良・人と自然の会
古都に広がる里山の彩り
奈良県奈良市

●里山林の入り口にあるビオトープ

●ビオトープにはたくさんの昆虫が訪れる。ちょうどチョウトンボが飛来した


●シカもよく顔を出す。新芽を食べてしまうので、少々困り者でもあるそうだ

●会員らによって整備された「ならやま観察路」

●ワークショップやイベントの際に集まることができる広場も整備されている。駅名標式はJRの払い下げ品を寄付してもらったもの。これに合わせて列車のオブジェを会員が手づくりした

●カエデやコナラなど、落葉広葉樹を新植した広場

里山を知り、楽しむ場としての「彩りの広場」

平城宮跡に隣接する歴史的風土特別保存地区に含まれる、約16haの広さをもつ「ならやま里山林」。周囲には1970年代に整備されたニュータウンが広がる。地域に残された貴重な里山環境ではあったが、実態は長年放置され荒廃していた。そんななか、自然環境問題を学ぶ「認定NPO法人シニア自然大学校」（大阪市）の卒業生ら45名で結成された「奈良・人と自然の会」が、2007年に奈良県と使用協定を締結。現在会員は県内外に約150名。このうち80名ほどが毎週木曜日に集まり、里山林の保全・再生活動に取り組んでいる。

これまで、立ち枯れた木の伐採や清掃、山中の観察路の整備を始め、ビオトープ、田んぼ、畑や果樹園を造成。子どもたち向けの自然観察会を開催するなど、人と自然が共生する、豊かな里山環境をつくり、その価値や魅力を普及・啓発する活動を展開してきた。そのうえで今回、助成によって整備したのは、里山の入り口に近い広場だ。水捌けの悪かった土地を改良し、カエデ、コナラ、クヌギ、カツラなど、紅葉する木々を植樹。板を敷いた歩道やベンチも配し、イベントやワークショップの際に集まれるような空間を構成した。

随時開催している自然観察や里山遊びは、今や人気のイベントで、市の広報やホームページで参加者を募ると、あっという間に定員になるという。新たに整備された「彩りの広場」も、自然を楽しむ子どもたちに、たくさんの経験を与える場になるはずだ。

広島市立倉掛小学校
令和に伝えるふるさとの自然「ふれあい里山ガーデン」
広島県広島市

●倉掛小学校の一角に整備された「ふれあい里山ガーデン」

●水流をつくった観察池にはアヤメやヒツジグサ、パピルスなど、水辺の植物を植栽。メダカもたくさん育っている

●タイヤ遊具を花壇として再利用。アサギマダラが飛来するフジバカマを植えた

●水路を補強する土嚢も児童らとともにつくった

●コナラやヤマグワなど、里山を構成する樹木も新植

ホタルの飛ぶ里山の自然を再生

太田川の左岸丘陵地帯に、1971年から開発が始まった高陽ニュータウン。広島市立倉掛小学校はその中にある。造成地に建つ小学校だが、団地の横を流れる諸木川周辺の田畑がある地域も入っており、ゲンジボタルの舞う自然環境も残る。だが、里地・里山の環境は減少しており、かつては普通に見られたギフチョウやゲンゴロウは、すっかり姿を見なくなった。こうした地域固有の自然を残し、未来へ伝えることを目指し、校庭の一角に「ふれあい里山ガーデン」が整備された。

対象地は、もともと観察池とタイヤ遊具などがあった一角。近年は児童数の減少もあり、ほとんど活用されていなかったエリアで、観察池も空っぽの状態だった。そこで、秋山哲校長以下、環境委員会や里山クラブの児童、職員、保護者らと共に一帯を改良。観察池にはポンプを設置して水の流れをつくり、水生植物を植栽。タイヤ遊具は掘り出して、アサギマダラが飛来するフジバカマの花壇として再利用した。サルナシやヤマグワ、アケビなど、里山の豊かな実りを体験できる、実のなる草木も新植。ゲンジボタルの幼虫も育てている最中で、いずれ観察池に放つ予定だ。

「ふれあい里山ガーデン」は、「育てる森」がコンセプトだ。これからも、児童や地域ボランティアの人々とも協力し、草木からの採種、育苗なども体験しながら手入れを続け、里山の環境を充実させていくという。校庭にゲンジボタルが飛び交う日が楽しみだ。

西日本短期大学 緑地環境学科 山本ゼミ
地域の寄る処『ふる里の庭』へ
福岡県糸島市

●西日本短期大学緑地環境学科山本ゼミの学生らが準備した、寄せ植えワークショップの様子。施設利用者もこの日を楽しみにしている

●ホビットハウスと称される小屋は、自然の枝を使った伝統的な工法でつくられている

●ホビットハウスの内部。螺旋を描く屋根が独特な雰囲気をつくる

●中央に草屋根の小屋を設け、色とりどりの草花を植栽した花壇の周囲に竹チップの園路を巡らせた「ふる里の庭」

●「ふる里」をキーワードに、郷愁をそそる、昔ながらの在来種も多く植えられている

美しく可愛らしい、訪ねたくなる庭

介護老人保健施設ふる里が所有する、段々畑のようになった斜面地は長らく放置された雑草地であった。2年ほど前、その一角を職員が整備、コスモス畑をつくったところ、施設の利用者はもちろん、地域の住民も鑑賞に訪れるほどに好評を得た。これを受け、以前から施設と親交のあった西日本短期大学緑地環境学科山本ゼミとの協働で、この場所を、利用者がもっと積極的に花や緑を楽しみ、地域の人々にも気軽に訪ねてもらい、交流の拠点となるような庭にすることを計画。あわせて、里山の竹林拡大対策も視野に入れ、伐採した竹をチップ状にして土壌に敷き詰めるプランも検討。竹資源活用に関する研究を行う福岡大学の佐藤研究室のアドバイスを得た。さらに、町のボランティアグループ、市役所や地域住民、子ども会などとも連携し「ふる里の庭」づくりがスタートした。

敷地の広さは約100㎡。中央には草屋根をもつ小さな小屋を建て、竹チップで園路を整備。その周囲には実のなる木やハーブ、色とりどりの花を植えた。小屋と連動したウッドデッキにはイスとテーブルを設置し、フラワーアレンジメントなど、草花を使ったワークショップを開催している。施設を利用する高齢者にとっては、園芸福祉の一環であるほか、ワークショップを主催するゼミ学生らとの多世代交流の場ともなる。地域の人々からの評判も上々だ。美しくて可愛らしい、自然豊かなコミュニティ空間が誕生した。

NPO法人みさと
もりのちいさな図書館 ～ひろがりのなる庭～
熊本県葦北郡

●デイサービスセンターのエントランスにも植栽を設けた

●デイサービスセンターの敷地と地域の人々が通行する路地の境界につくられた緑地。屋外でおしゃべりを楽しむ利用者と地域の人々がさりげなく交流できる

●「もりのちいさな図書館」。外壁は、プロジェクトに賛同した画家の大平由香理氏と、地元小学校の子どもたちによって描かれた。2020年7月に発生した豪雨被害からの復興事業でもある

●身近に花や緑があると、自然と会話も弾むようだ

●デイサービスセンターの反対側の側面にも庭をつくり、ベンチも配した

多世代が交流する庭

熊本県葦北郡芦北町。人口減少と高齢化が進むこの町で、通所介護事業を行う「美里デイサービスセンター」の敷地内に緑豊かな庭ができた。青々とした芝生に、ブルーベリーやジューンベリーなどの実のなる木、ミントやタイムといったハーブも育つ。通所するお年寄りが、自ら手入れもできるレイズドベッドには、ブルーサルビアやセンニチコウが可憐な花をつけていた。緑に囲まれた空間にはイスやテーブルも配され、自然を感じながら、おしゃべりに興じることもできる。

整備にあたったのは、デイサービスセンターを運営する「有限会社美里在宅支援事業所」を母体とする「NPO法人みさと」。介護保険事業を通じて直面した地域の課題や、埋もれていた地域の文化や資源に気づき、「美しいふる里でいつまでも」を理念とし、介護事業とNPO事業の両輪で、伝統行事の継承や交流拠点づくりなどを多面的に行っている。

NPO事業の一つに、「もりのちいさな図書館」がある。デイサービスセンター裏手の倉庫を改装し、近隣の子どもたちが自由に訪れ、本を読むことができる場をつくり、お年寄りとも交流できる拠点とした。今回整備した庭は、図書館へのエントランスも兼ねている。

新型コロナウイルスの蔓延により、人々の交流機会は制限されてしまったが、屋外の、緑豊かなこの庭では、お年寄りと地域の人々が自ずと出会う。さりげないけれど温かな交流が、地域の魅力を育んでいる。

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボル的な緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだプランを募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞800万円以内（工事に対する助成金）
	緑化大賞	2点程度	副賞800万円以内（工事に対する助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（工事に対する助成金）
	コミュニティ大賞	9点程度	副賞100万円以内（工事に対する助成金）

審査委員

委員長	進士 五十八	福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授
委員	稲垣 精二	第一生命保険株式会社代表取締役社長
	宇野 善昌	国土交通省都市局長
	坂井 文	東京都市大学都市生活学部教授
	鈴木 裕一	株式会社産業経済新聞社上席執行役員
	永山 妙子	マネジメントコンサルタント
	三上 真史	俳優・タレント
	村上 暁信	筑波大学システム情報系教授
	盛田 里香	一般財団法人第一生命財団常務理事
	梛野 良明	公益財団法人都市緑化機構専務理事

※役職は2021年審査会当時

スケジュール

募集期間	2021年4月1日～6月30日
審査会	2021年9月10日
入選発表	2021年10月14日

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会
特別協賛	第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、 都市緑化基金等連絡協議会 株式会社産業経済新聞社

※2021年度運営体制

city & life 別冊

2023年3月20日発行

発行者　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子
中西あきこ

撮影　坂本政十賜

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life 別冊